明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正四年一月十五日發行（毎月一回十五日發行）

壹月號
第二百三十九號

統一

日蓮主義に對する希望
文學博士　井上哲次郎

吾が信仰の經歷
安川末子

大丈夫の本領を徹底せよ
三上義徹

思想の撰擇と予の信仰
藥學得業士　金澤嚴

水魚の念
法學博士　山田三良

精神の訓練
大僧正　本多日生

本多日生師著
▽法華經講義
（特價金參圓也 郵税十六錢也）

軍事教育會發行
△精神の修養──思想の調整
（各一部金貳拾錢 郵税一部六錢 二部八錢）

△縮刷妙法蓮華經並開結
（第一種紙表紙金貳拾錢郵税四錢 第二種布製金四十五錢郵税六錢 第三種皮製金八十錢郵税六錢）

△橘香集
（統一閣發行）（紙製一部十錢郵税二錢）

▲勤行作法
（統一閣發行）（一部五錢五部迄郵税二錢）

小原陸軍少將講演
▲軍神加藤清正公
（東京白山會發行）（一部二錢貳百部以上は割引の特約あるも貳百部以下割引せず）

▲天晴會講演錄第二輯
（殘本數部あるのみ）（金貳圓也郵税十二錢）

東京小石川白山前町十七番地
◎申込所　三上義徹
振替東京二八八四〇番

大丈夫の本領を徹底せよ

新年の初頭に御互に御芽出度と云ふ喜びの聲、この悦びの心より溢れ出づる生活展開の希望の光、この穢れなき新年の光に照されたる人間本來の氣力は、合理的なる充實生活を翹望して、あらゆる人生の爭鬪を突破し、永遠の肯定に進まんとする、こゝに一段の奮鬪と努力とを要する所以、吾等はかゝる無限の發展を條件として人としての存在を意味するのであつて、即ち大丈夫の本領正に須らく斯くあらねばならぬ、若しや、外的事情に拘束せられて享樂の甘きに醉ひ、五十年の生涯のみを面白く暮さんことに惱み、無限の吾が生を開展して安全なる基礎を据えることに無雜作なる態度は、單なる肉體的生存欲に支配せらるゝ小人の生活である、小人の生活は人生の本義でない、釋迦牟尼は法華經に示して云はく

『咄哉丈夫、何爲衣食、乃至、如是我昔欲令汝得安樂五欲自恣於某年日月以無價寶珠繫汝衣裏、今故現在、而汝不知、勤求憂惱、以求自活、甚爲癡也』

と、吾等は丈夫てある、丈夫何ぞ單に物欲の奴隷となり、無價の寶珠たる大生命の發揮

に努めざるや、久遠の生命は不滅である、吾が久遠の生命は、無限に發展して永久に活動するのである、大丈夫この理義に徹底し其自覺に立たざれば、其は卑しむべき小人根性たるを免れぬ、小人根性は極端なる自利主義にして目前充欲主義である、公正も節義も顧みざる我利盲目の思想は、孟子之を娼婦の道であると斥けて居る、斯かる思想は、大丈夫の斷じて取らざる所、大丈夫の本領は佛教に說ける活ける菩薩の態度でなければならぬ、菩薩とは釋迦牟尼時代の戒律堅固の修行者のみを指すのではない、また御寺の本堂に祭られたる木像が、菩薩の代表であると思ふは間違である、菩薩は上に發展向上の念を强め、下は總ての人類に對して精神的救濟に努力するを云ふのである、大丈夫の本領亦斯くあらねばならぬ、されば菩薩と大丈夫とは、其文字異なりと雖理義相契合して異なる所なきを見る、即ち大丈夫の力は、衆敵の中に毅然として踏み留まり、又は屈辱の立場にありて豪然として剛健を示し、至明公正なる大道を濶歩して生活の創造を遂げずんば已まざるものである、人生に於ける矛盾や撞着や闇黑は事實であるが、その闇黑を突破して心的爭鬪を斷行しつゝ、新らしき人生を作り上げるのが大丈夫である菩薩である、斯くてこそ大丈夫の本面目を發揮することが出來る、孟子の道破せられたる大丈夫の意義を觀るに

『居天下之廣居立天下之正位行天下之大道得志與民由之不得志獨行其道富貴不能淫貧賤不能移威武不能屈此之謂大丈夫』

この凛乎たる態度と雄々しき氣力とにより、力ある發展と新生活とを獲得し、さらに廣く人類共同の自覺を促がし、以て永久の存在發展を圖らねばならぬ、即ち法華經に說ける『一切皆共成佛道』と云へる最後の肯定に進まねばならぬ、斯かる幽遠なる靈的慾望を要する、若し夫れ靈的慾望を無限に强むれば、その慾望を亢進せしめつゝ大丈夫としての生の向上があり、亢進努力の存する所には自から大なる薰化があり、其處に自他倶安の和樂を產み出さるゝものである、先づ珠かけながら迷へぬる現在の自己に大折伏を加へて久遠の一念に立ち歸り、さうして天下の廣居に立つて天下の大道を行ひ、思想界の中軸として自覺と權威があらねばならぬではないか、昔より大丈夫であると威張つて居つた者はあつたけれども、何も部分的にして頗る貧弱である、大丈夫の全本領を發動せしめたるものは無い、こゝに於てか、吾等はどうしても偉大なる日蓮上人の人格を欽仰せざるを得ない、上人の全人格は今現に事實に活きて居る、さうして、爾等は總て人間的自覺に立つて奮鬪せよと策勵せられて居る、吾等は名利に囚はれて小人根性に使役せらるゝこと度々てはあるが、上人はいかに、權門富貴に便りて瓔珞幡蓋の下に居

らず、吾等は紅塵の地を去つて偷安を貪らんとする意氣地なしてあるか、上人はいかに、俗を避け世を厭ふて深山幽谷に睡らず、身には破れたる法衣に荒編の牛草履といふ貧弱なる實生活てあつたが、一水心揺げば六十餘州の大波動を起すべき鎌倉の街頭に、雨の朝にも風の夕にも、宇宙の大道を提げて本佛照鑑の下に、久遠の一念に立ち歸れ佛性の發現に力盡せよと熱叫せられたが爲に、迫害又迫害、釋迦牟尼の敎識たる刀杖瓦石數々擯出の難は、日蓮一人を目蒐けて集り來りしも、大丈夫日蓮上人、自己の使命を自覺して凛乎たる宗敎的節義に住するが故に、富貴も威武も貧賤も敵することは出來ない、其壓迫多難の間に處して、反て元氣旺盛てある、無限の悅びに包まれつゝ運動は猛烈を極めたのである、上人自から其内的狀態を告白して

『既に經文のごとく惡口罵詈刀杖瓦礫數々見擯出と說かれて、かゝるめに値候こそ、法華經を讀むにて候らめと、いよ〳〵信心もおこり、後生もたのもしく候』

とは、人生のあらゆる障害と戰ひながら、悅び勇んで内的發展の終局に凱歌を奏して進行せられて居る、正しく大丈夫の全本領の發動てある、斯くありてこそ、堂々たる大丈夫の精神を具へたるものと云ひ得るのてある、されば、上人は自からの資格を說明して

『我身はいうにかひなき凡夫なれども、御經を持ちまいらせ候分齊は、當世には日本第

一の大人なりと申すなり』

と云ひ、一面には乙女の如き優しき謙遜の態度てはあるけれども、その宗敎的生活の上には、大なる勇猛心と大なる努力とを以て、敵前に奮鬪せる花も實もある日本第一の大人、法華經に訓練せられたる大人格の靈氣は、萬古に大丈夫の範を垂れ、潑溂として大正の現代に活躍し、廢頽せる精神の救濟に全力を傾盡せられ、絕對の權威を以て指導せらるゝを拜する。

いまや、所謂文明は高度に進みたるも、人は唯だ物質の利欲を獲んとして互に相爭ひ、國と國とは戈を交へて欲望を充たさんことに力め、思想界の問題は紛糾を極めて精神生活の進路を遮り、小人生活や目前根性を跋扈せしめて居るのが、それが否定することの出來ない現在の事實てはないか、斯かる危險なる現代に於て、各人の生存の事實に大丈夫の力と本領とを發揮して、内的生活を充實せしむべく、大正第四の初頭を機會として徹底的に自覺し、意義なき現在生活を轉回して久遠の生活に歸り、自己の爲に國民の爲に、大道の爲に法華經の爲に、國家の爲に世界の爲に、徹底的立脚より大丈夫の本領を發動せしめよ、須らく爾自身の生命の不滅活動の實證に努めよ。

日蓮主義に對する希望

文學博士　井上哲次郎

今回日蓮宗の各教團が統合されまするに就いて、私にも何か意見を述べるやうにと云ふことでありました、私も中々多忙な身でありますけれども、今日此處に參りまして多少意見を述ぶるに就ては少し理由があるのであります、敢て演説が仕たいからやつて來た譯でもなく、又奇を好んで參つたやうな次第でもないのであります、實は私も日蓮宗に元關係のあつたものであります。別に日蓮宗の僧侶であつたと云ふ譯でもありませぬが、私の父は日蓮宗の非常に熱心な信者でありましたから、自然私も極く小さい時、未だ十歳か十二三歳位の頃に、父の傍に坐して矢張りお題目を唱へたのであります。日蓮宗の今回の統合と云ふことに就いても、さう云ふ緣故があり旁々御依賴もありましたからして、參上して種々意見を述べて見やうと云ふ考になつたのであります、今日は私より以前に四人ばかりの方々の御講演があつたさうでありますが、實は私もそれ等を悉く拜聽してさうして私の意見を申上げると宜かつたのでありますけれども、どうも時間が許しませぬので前の御話を承ることが出來ませんでした、從つて私の述べる事が或は偶然に前の方々の御話しになつた事と同じやうなことになるかも知れませぬ、何故ならば、前の方々も必ずや各教團の統合を御贊成になつた御意見を述べられたのでありませうし、私も無論反對ではなく、大贊成の意を表するのであるから、自然同じ事を申上げなければならぬ事になりませう、併し假令同じ事があつても、前の

方々は前の方々夫れ夫れの考より贊成されたのであつて、私は私の考で以て贊成するのであります、違つた立脚地から違つた口で、贊成するのであるから、斯う云ふのは一人でも多い方が宜からうと思ひます、そこで私は此の事に就いて眞先に斯ふ云ふ感じを起しました、實は私も日蓮宗の方々に多少交際をして居る人もありまして、能くは存じませぬけれども、日蓮宗と云ふものは各派に分裂して居つて、中々能く喧嘩をする宗派であると云ふ感想が腦裏に在つたのであります、さう云ふ考がどんな所から頭に這入つて來たか存じませぬが、マア社會の空氣から傳播されて來たものと思はれるが、何だか日蓮宗は八釜しい宗派で、始終互に喧嘩して居る、喧嘩好きの宗教であると云ふ考が先入主となつて居つた、世にはさう云ふ考を持つて居る人が多からうと思ふ、然るに今度日蓮宗の各教團七派が悉く合同して仕舞と云ふとを耳にするに及んで、私も今申上げたやうな考が腦裏に潜伏して居りましたから、先づ第一に是は妙な事だと思つたが、考へて見れば良い事である、誠に結構な話である是が爲に平素の考がグルッと覆されたのであります、妙に感じたが惡い方になるのではなくして良い方に變つたのであるから、喜ばしい現象であると思ひます、今日の日本宗教界の趨勢から見ましても、日蓮宗と云ふ宗教が幾つにも分裂して居つて、互に喧嘩をして居るが如きは誠に無意義であると言はなければならない、何故ならば、今日は昔と違つて外國から基督教のやうな宗教も這入つて來て居て、中々宗教も種々になつて居るのであります、此際に當つて日蓮宗が互に同志討を演じて居るやうなことがあつたならば、日蓮宗としての存在の意味が甚だ不明になつて來る、又、元來日蓮宗と云ふものは皆日蓮上人の教に基いて起つたのであるから、もともとそんなに分れて居つたものでも何でもない、それが後に種々分裂を見るやうになつたのであるが、互に喧嘩ばかりして居るやうなことがあつたならば、どうしても日蓮上人の趣旨に合はず且日蓮宗の目的を達することが出來ない、そこでどう

しても各教團を統合して一つとなし、各派の持つて居る力を集合するの必要を生ずる、統合すれば七教團個個別々になつて居つた時の七倍の力が生ずる、同じ日蓮宗が七つにも八つにも分裂して居つては、其の各派の力たるや微弱となるを免れないから、恐らく思ふ通りの事を爲すことが出來なかつたらうと思はれる、局外者から見ますれば、如何にも思ふ通り行かなかつたかのやうに想像されます、併し合同してやれば中々力が増して來る、今迄は内部の爭ひの爲めに餘分の力を消耗して居つたのであるから、合同後は從前の七倍以上に其の力を増大することが出來るであらうと思ひます、さうして、其の強大となつた力を外へ向けることが出來ます、何と面白い事てはありませぬか、此の事は今日の戰爭のことゝ對照して考へて見ても分る、戰爭と云ふものは、最初は小さな團體と小さな團體との間の戰ひてあつたが、勢力を増大して敵に當るの必要上部落と部落との戰爭となる、段々進化して國と國との戰爭が行はれるやうになつたのである、併し今日ては國と國との戰爭では倘勢力の不足を感じ、數個の國々が聯合して他の大敵と相對することになつた、之に依つて見ても大なる目的を達するには大なる團結した力の必要なることが分りませう、獨逸も自己の野心を滿足させるには、其の力を強大にしなければならぬと考へたから、墺太利伊太利と聯合して三國同盟を結んで戰爭する積りてあつたが、伊太利は同盟から分離して局外中立を宣言した、已むを得ず獨墺二國で戰つて居るが、伊太利の離れたのは獨逸に取つては豫想外であつたと思ふ、此の獨墺二國に對して英吉利佛蘭西露西亞日本等種々の國が聯合して當つて居る有樣てあります、聯合しなければ中々大戰爭は出來ないのです、聯合すればそれだけ偉大な勢力を發揮することが出來るから、必然の結果として聯合するのである、眼前に斯の如き適例を目撃して考へて見れば、統合の必要なることが痛切に感ぜらるゝのであります、斯ふ云ふ場合てあるから統合の話も滑かに進むのであらうと思ひます、斯る機會を逸しては統合の目的を達するこ

とは六かしい、希くは此の統合を永遠に繼續し日蓮宗本來の目的を達するやうにしたいものである、それから佛教の中には種々の宗教がありますが、或宗派に至つては此の國家と云ふ觀念が大變に薄い、どうも宗教としては中々立派な教義があつても、國家と云ふ觀念の殆ど缺乏して居る宗派があります、更に基督教に至つては殆ど國家と云ふ觀念を有して居りませぬ、基督教ては國家以上の高い立場から見る爲、世界主義の立脚地からして日本の國體などを種々批評しますが、遂に日本の大切なる國體と云ふものを蔑視して、甚だしきに至つては之を破壞するやうなこともやり兼ねないやうな言動をする、私は其の實例を幾らも知つて居ります、私は豫てより絕へず斯う云ふ方面には注意を拂つて居りますが、基督教の或るものに至つては此の國體の破壞するやうな怪しからぬ議論を發表するやうなものがある、それは諸君も御注意にならぬといけませぬ、さう云ふことは假令些細なことでも非常な禍を日本に及ぼす虞がある、所が此の日蓮宗はさう云ふ點に於ては大變特色を有して居る、中々日本的に出來て居る、私思へらく日蓮宗と云ふものは全く佛教の粹と日本の粹とを打つて一丸と爲したものである、日蓮宗と云ふものは佛教を武士道化したものである、佛教を武士道化した宗教は日蓮宗を措いて他に無いのである、佛教の武士道化とは何てありませうか、即ち日蓮宗が日本の武士道の武勇と佛教の深遠な教義とを結合して出來て居るのを言ふのであつて、是れ實に日蓮宗の最大長所であると思ひます、佛陀の開いた佛教其物には武勇の精神を含んで居りませぬ、佛陀在世當時の印度は日本と違ひまして各國に叉れて居つた、さうして其頃あまり賴みになるやうな偉い國はなかつたのである、そこて佛陀は國家を超越した偉い教へを立てたのである、此佛教が

日本に傳來して以來、日本の佛敎の歷史は種々變遷し大きな變遷は三度ありますが、鎌倉時代が顯著なる一の革新である、佛敎と云ふものを日本化しやうと云ふ努力が大變にあつた、それが最も著しく現はれたのが日蓮上人であります、其の日蓮上人に依つて開かれた日蓮宗は、日本の國體と云ふものを基礎に置いた宗敎であります、此の點に於ては淨土宗などは國家と云ふ觀念が極めて乏しい、日蓮宗は日本の國體と云ふものを立て、佛敎の敎義と一所にして出來たものであるが、尙勇氣と云ふものを含んで居る、抑々佛敎は印度に於て印度の時勢に適應するやうに出來たものでありましたが、日蓮宗は之を日本の國體と一致させて、印度の佛敎の極く宜い所と、日本の國體の極く宜い所とを融合して、兩者の粹が集まつて出來たものであります、洵に是れ日蓮宗の特長であります、さうして勇氣元氣の滿ち溢れて居る宗敎であります、又支那と云ふものは勇氣が乏しい國であります、支那人は智仁勇と言つて勇氣を三德の中に數へて居りますけれども、勇を說いたものは孔子位のもので、其以後に勇を論ずるものもなく、支那人に勇氣は失せて委微して仕舞つた、宋の時代に至り程朱の學派が盛に起つたけれども、勇を論ずる者はなく、此等の經書中より勇の字を發見することが出來ない、近思錄の中にも勇の字は一つもなかつたやうである、支那人は種々文章を書いたり、考へたりして居るけれども、勇氣が失せ元氣に乏しいからどうも物足らぬのです、元は智仁勇と云ふて勇の敎があつたけれども、五常の仁義禮智信に至つては勇の字が省かれてない、其以後更に勇の敎を見ないのであります、現在に於ても支那人に勇氣が缺乏して居る、支那人たるもの大に努力する所がなくてはいけませぬ、支那人の勇氣のないことは日淸戰爭に於ても立證されて居る、それで、矢張り勇氣と云ふものは敎へと一所に結び付いて社會に行はれて居らぬと云ふと、國民の元氣は消耗して無くなつて行くものです、今の青年の氣風が著しく輕薄に傾いて居るのは、妙な小說、即ち戀愛小說などばかり耽讀して居

る結果、精神が弱くなつて仕舞つたものと思はれます、そんな小說ばかり讀んで居てはいけない、併し小說の耽讀を全然禁止するのも、あまり頑固に失するから少少は許しても差支なからう、要するに健全なる精神がなく浮々ソワソワして居るのが今の青年の弊である、青年にチャンとしつかりした所がないのは勇氣が缺乏して居るからである、國家の勃興はどうしても其國民個人個人の潑溂たる元氣に俟たなければなりませぬ、個人個人の元氣が失せれば何で國に元氣がありませうぞ、日本の國家の發達の基礎は國民の元氣に在るのであります、　況や刻下の大戰爭より考へましても國に元氣の必要なることを愈々痛切に感ずるのであります、抑々戰爭と云ふものは何時迄經つても無くなるものではありませぬ、先年亞米利加からジョルダン博士が來朝して、日本の各所に於て平和主義を力說されましたが、其のジョルダン博士が歸途に就き漸く米國へ着いたか着かぬ中に、支那に於て革命戰亂が突發した、續いて伊太利と土耳古とはトリポリに戰ひ、更にバルカン半島の雲亂れると思ふ程もなく、今回の全歐洲大禍亂が勃發しました、平和主義いづこに在りやと疑はれるのであります、それで世界には常に戰爭が行はれて居るのでありますが、凡そ戰爭には廣い意味の戰爭と狹い意味の戰爭との二つがある、廣い意味の戰爭とはダーウヰンの主張した進化論に於ける生存競爭でありまして、獨り人類のみならず動物でも植物でも總ての生物は、自己生存の必要上戰爭又は鬪爭をして已まないのであります、此の意味の戰爭は世界に生物のあらん限り已む時がないのであります、狹い意味の戰爭は、人が己の慾望を滿たさんが爲に他國を侵略する戰鬪でありますが、是も容易に盡きることがない、各國はどうしても互に利益の問題に於て衝突を生ずる事を免れないのでありますが、其問題を解決する最後の力は武力兵力より外ないのであります、世の中が進歩すると共に戰爭の數が少くなると思ふのは間違いて

あります、現に日本にも平和協會が出來て、今後は戰爭がないと言つて居つた其の舌が未だ乾かない中に、日本は戰爭の渦中に投じて仕舞つた、平和協會や平和主義者は戰爭と云ふものを非難攻擊して至らざるなしであるが、論より證據どしどしやつて見せて居ります、此の戰爭が何時になつたならば已むか、已むと云ふ證據がない、戰爭が已むと云ふ證據がどこにありますか、戰爭が昔より次第に減少して來て、過去の千年間に僅か幾つしかないとか云ふならば、成程いつか已むてあらうと考へることが出來ますけれども、過去の千年間に幾ら戰爭があつたかと云ふに數へ切れない程澤山ある、諸君が戰爭は已むものと考へたら大なる誤りてある、戰爭は已まぬものとして覺悟して居なければならぬ、それてあるからどうしても此の勇氣元氣と云ふものが國民になければならぬ、是が缺けて居ては、到底將來日本國民が世界の競爭場裡に立ち打ち勝つて進むことが出來ませぬ、玆に於て矢張り日蓮主義のやうな大變勇氣のある宗敎が人間を敎化して行く必要がある

弱い敎へてはいけませぬ、て、日本には古來武士道があつたのてありますが、武士道の敎へとは智仁勇てあります、此の敎は日本の大昔から存在して居たのてありますが、大昔には字もなかつたから智仁勇と云ふことを表現することが出來なかつた、それて神代から傳はつて居る三種の神器は、此の智仁勇の意味を示したものに外ならぬのてありまして、草薙の劍は即ち勇を表はしたものと思はれます、勇氣と云ふことを武器を以て表示したのてあつて、斯う考へて見れば、日本人は古來勇氣のある素質を持つて居つた國民てあることが能く分ります、さうしてそれが社會に充ち滿ちて居つて今日迄傳はつて來て居るのてあります、日本國民たるものは斷じて此の勇氣を失つてはいけませぬ、

今の青年の弱つて居る奴などは日蓮主義に歸依して御題目を盛に唱へたならば、彼等は厭世悲觀の念を去り大勇猛心を喚起することが出來やう、クヨ〳〵考へ事をしてばかり居るから、腦を痛めて厭世悲觀の念を萠すのである、若し盛に御題目を唱へて南無妙法蓮華經をやつたならば、他の詰らぬ事は皆忘れて仕舞ふ、さうして一生懸命に御題目を唱へて居れば、日蓮上人の勇氣を受けて弱い奴が何時の間にか元氣に充ち滿ちた好青年になる、

そこて今回日蓮宗が合同しやうと云ふことは誠に喜ばしいことてあつて、私は心から贊成の意を表します、それと同時に少しく私の希望を申上げますると云ふと、宗敎學校殊に日蓮宗の學校などては、幾らか世間の手本になるやうにしなければならぬ、それが宗敎の本旨てあらうと思ふ、若し世間の俗人の學校と同じやうに、同盟休校をやつたり敎員排斥をしたりするならば、それは決して宗敎の本旨に副ふ所以てない、それてはどうも人を敎へるのてなく、人から敎へられるのてあつて少し困るてすなあ、日蓮宗は存じませぬが他の宗派にはさう云ふことがある、例へば豐山大學でも騷いて居たし、又現に京都の何宗大學とかは今頻りにやつて居て敎員をぶん毆つたさうてある、私は能く存じませぬが敎員をぶん毆つて半死半生の目に遇はせたとか、偉い重傷を負はせたとか云ふことてあります、是は餘程注目すべきことてあります、一體宗敎家の任務は何かと云ふに、私は斯う思ひます、世の中の人間の種類を二つに分けて、善い人と惡い人と區別することが出來る是は分かり切つたことてあります、分かり切つたことてあるが、宗敎の方ては大變種々な意味を持つて居るのてあります、或る人は善良な事を爲し段々善い方に發達し、光明に向つて進み立派な精神を持ちつつ生活する、一方の者は之に反し、高尙なる精神なく元氣を消耗し墮落して無明の暗にさまようて居ります、而して世の中は、昔から今日迄、善惡邪正の戰爭てあります、一方の人は次第に善い方面に向つて進歩せんとするものてありますが、善方に進むには手本が必要てある、そこて昔の偉人傑士、日蓮上人のやうな偉人の後を慕

うて光明に向つて努力しなければならぬ、玆に非常な勇氣が要るのであります、支那の哲人歐陽明は役人であつた時に、賊を討伐して歸つて來て斯う云ふことを言つた『破二山中賊一易　破二心中賊一難』兒賊を討ち滅ぼすのは容易であるとしても、心の中の敵惡魔を擊破するのは非常に困難である、我々人間の心の中に潛んで居る勁敵は、動もすれば我々を惡い方に陷れやうとする、此の敵を先づ第一に討ち滅ぼして、然る後に他の敵に向はなければならぬ、佛陀は正しく此の敵に勝つて居る、自分の心の中の敵に勝てぬ以上、どうして外敵に勝つことが出來ませう、我々人間が此の社會に立つて活動するには、先づ以て自分の心中の賊を拂ひ除けて置かなければならぬ、昔の立派な精神界の偉人、佛陀孔子日蓮等の跡を追うて光明に向つて進まなければならぬ、是等偉人は我々の味方であつて、佛陀や孔子は精神界の元帥大將と申すべき方々であります、我々は此等元帥大將を上に戴いて惡に向つて戰ふのであります、所が又惡い方の側も樣々になつて居ります、中々惡い奴も澤山あつて、物を盜んだり人を殺したり種々ある、殊に近頃は隨分强盜や泥棒が橫行するから餘程用心せぬといけない、私などは何も持つて居りませぬが、それでも少しでも盜られては馬鹿馬鹿しい、併しこんな泥棒や强盜は小問題である、それよりもつと激しい精神界の戰爭が行はれて居て絕へる時がありませぬ、**宗教の任務は、實に世の中の害惡を撲滅して社會の進運を助長するに在る**、それには世のあらゆる罪惡に對して力戰奮鬪する大勇氣が要ります、而して勇氣と云ふものは、どう云ふ方面に向つて發揮すべきかと云ふ事を注意せんければなりませぬ。惡い方に發揮しては駄目であります嘗て孔子の弟子に子路と云ふ人がありました、元來此の子路と云ふ人は、市井無賴の徒でありましたが、孔子の弟子となり道を學ぶことになりました、從つて人と爲り大變勇氣を持つて居て、若し孔子の弟子にならなかつたならば不良青年で終るべき人であります、人をぶん毆る位は行り兼ねない方でしたが、孔子の弟子

となつてどうしても惡いことが出來ないやうになつた、或日子路は孔子に向つて『君子尙レ勇乎。』と問を發した、孔子は之に答へて曰く『君子以レ義爲レ上。君子有レ勇而無レ義。爲レ亂。小人有レ勇而無レ義。無レ盜』子路には勇氣は大變あつたけれども、由來市井無賴の徒であるから、孔子の敎を受けなかつたならば泥棒になつて居たかも知れない、そこで唯勇氣ばかりあつたとて何の役にも立たぬ、義と云ふことを學ばなければ人間として値打のないものであると云ふことを說いて『小人勇あつて義なければ盜を爲す』と一喝したから、子路はすつかり參つて仕舞つて一言もない、そこで勇氣と云ふものは必要である、大變必要なものであるけれども、義と云ふものと結び付いて居らなければならぬ勇氣は一の成功の力であるから非常に大切なものだが、正義人道の爲の勇氣でなければ、徒らな空漠な勇氣であります、所謂蠻勇であつてこんな勇氣はいけない、立派な勇氣は正義人道を發揮する爲の勇氣である偖、宗教家の任務は何を目的とするものであるかと言へば、社會の害惡に向つて永久の戰いを宣し勇ましく奮鬪するに在る、社會に罪惡の存せん限り是が擊滅の爲め戰つて已まないものが宗教であります、西洋でも宗教はさう云ふやふに解釋して居る、所で西洋にも日蓮宗見たいなものがあります、彼の救世軍が即ち是であります、全然日蓮宗と同じでないが似て居る所がある、太鼓を叩く所など似て居る、併し太鼓の形など同じではないがあゝ云ふものを組織したかと云へば、世の中の諸方面に害惡が蔓り迚も手緩いやり方では間に合はなくなつたからである、世の中の墮落者を救濟し世の中の害惡を撲滅する爲、軍隊的組織の下に活潑な軍隊的行動を執るやうにしたのである、世界第一の大きな都たる、英吉利の倫敦の西部(ウエストエンド)には、紳士富豪が軒を並べて居りまして、都會の光明なる一面を表はして居りますが、一方東部（イーストエンド）へ參りますれば、浮浪人や强竊盜常習者の巢窟て、社會のどん底に沈淪した貧窮民ばかり集つて居りまして、實に悲慘極まるものであります、此の一劃へ

足を踏込めば必ず所持して居る金品を奪はれ、動もすれば生命迄取られると云ふ危險な場所である、此の暗黑世界を救濟せんとするには、基督敎の牧師が敎會で唯說敎を試みる位では寸功もない、そこでウヰリヤムブースなる人が救世軍を創立し、自ら大將となり軍隊組織と爲し、太鼓を叩いて世の害惡を攻め戰ふことにした、總て軍隊の行動に則り、信徒を軍人と稱し、未信者と戰ふ組織である、餘程日蓮宗に似た所がある、西洋の日蓮宗と稱すべきものであります、而して此の軍隊的行動と云ふことは、基督の弟子たる使徒保羅の戰爭的の勇敢なる說敎傳道を手本として編制したものである、基督敎の福音書の記す所に依れば、保羅は最も熱烈に基督の敎を宣傳する事に努力したもので、其の生涯は戰鬪である、種々の迫害を蒙り幾度か殺されやうとしたが、遂に異邦人の手に掛り敢ない最後を遂げた、其の保羅は『善き戰ひを戰へ』と言つて居る、さうして宗敎の傳道に從事する者をば『神の敎への爲に社會に向つて戰ふ兵隊』であると言つて居る、ブース大將の救世軍を軍隊組織に編制した精神は玆に基いて居るのであります、此の救世軍が太鼓をドンドン叩いて市中を練つて歩くと、如何にも珍らしさうに思つて居る人がありますが、さう云ふ人は我が日本に日蓮宗と云ふ更に立派な宗敎があるのを知らぬのであります、ブース大將は僅か二三年前に死去した人であつて、從つて救世軍の出來たのも比較的最近のことでありますが、我が日東帝國には、六百年以前の鎌倉時代から日蓮宗と云ふ立派な宗敎が存在して居て日本人の敎化に努めて居る、ドンドン太鼓を叩いてやつて居るのであります、一體鐘と云ふものは退軍の音樂であるが、太鼓は實に進軍の音樂であります、太鼓の鼕鼕たる響は、唯進むを知つて退くを知らざる勇壯なる音調であります、そこで日蓮宗は勿論の事、總ての宗敎は害惡に向つて戰鬪し之を擊滅するの任務を持つて居るのであるが、萬一其宗敎家自身が害惡となつて居

ると云ふやうな事があると一寸變ですなあ、宗敎家自らが同盟休校や敎員排斥をやつたり、又敎員が互に軋轢確執を生じて居たりしたならば誠にどうも困るのです、是等は殆ど度すべからざるものです、之を佛陀に聞かせたならば末法の事は仕方がないと嘆息するでありませう、斯んな事は日蓮宗には決してありますまいが、今日の宗敎界の一部にはさう云ふ實例があるから念の爲申上げたやうな次第です、それで、統合せられたる日蓮宗は增大したる力を以て、社會の進運を進め光明の側に發展せしむることに大に努力して戴きたいさうして日本の國體を維持し、日本の國粹を發揮し、日蓮主義の大理想を世界に實現せられん事を切望致します、最後に尙一言申上げて置き度いことがあります、それは現在の交戰國たる獨逸も國家主義を理想として居るものである、併し日本の國家主義と獨逸の國家主義とは大變違ふ、獨逸の國家主義は他國の事はどうなつても構はぬ、他國を侵略して唯自分の國の利益をのみ圖ると云ふ主我的の國家主義である、然るに日本のは正義人道を重んずる國家主義であつて、日本は世界に正義人道を行はしめんと云ふ公明正大な理想を持つて居るのであります、獨逸とは其の根本の眼目を異にして居る、又、斯ふ云ふ話がある、英佛露の聯合軍は日本の歐洲出兵を希望して居ると云ふ、日本から軍隊を歐羅巴へ送るとすれば、莫大なる經費と時日とを要するのであるから餘程考慮しなければなりませぬ、併し聯合軍側も隨分長い戰爭であるから、次第に疲勞して敏捷な活動が出來なくなり、英姿颯爽たる日本精兵の來援を熱望して已まないやうになつたならば、日本は約三十萬の軍隊を露國の西比利亞鐵道線に依り輸送し、獨逸の國境に兵力を集中して置いて、急々伯林城を攻擊する時には、日本軍が眞先に進んで行つて、一擧に伯林を陷落せしめて、城頭高く日章旗を揭げると云ふ位の勇氣がなければいけませぬ、斯ふ云ふ大計畫は迚も問題になるまいと云ふやうな因循な考へてはいけない、大に問題として見るが宜しい、百萬五十萬の大軍を輸送するならば非常に困難であらうけ

れども、二十萬や三十萬の兵を送れない筈がない、尤も随分經費も要りませうけれども、經費以上の價値がある、是は實に世界的の意義を持つて居る、世界開闢以來の歴史に於て、一度日本民族が抹殺すべからざる痕跡を歐羅巴の地に印するのである、伯林は歐羅巴の心臟とも云ふべき重要な所であります、其の心臟を日本軍が突いて忽に敵の息の根を止め、伯林城に皇軍の武威赫々として輝く時、鬨と共に萬口一齊聲高らかに南無妙法蓮華經を唱へましたならば、如何ばかり痛快でありませう、進取的精神氣魄の充ち滿ちた日本國民は、此の位の元氣がなくてどうしませう、斯う云ふ方面に勇氣を發揮することも必要である、日本の精神は唯伯林を取ると云ふ利己的の考でなく、獨逸が蠻行を逞うして世界に害惡を流すから、其の害惡を除き世界の平和や幸福を增進させる爲であるから立派なものであります、今の青年は臆病でさう云ふことを言ふとびく〳〵して居る、そんなことではいけませぬ、兎に角日本國民が大なる發展を遂げ最終の理想を遂行せんとせば、日蓮宗の如き非常に勇氣ある宗教に依つて進んで行かなければなりませぬ。

▲日蓮門下各敎團の統合案、之は日蓮上人の聖旨であるのは勿論、亦時代の進運を助長すべき天來の要求である、日蓮主義が國家風敎の中軸である上は、日蓮宗と云ふ形式敎團は縱令ないとしても、風敎樹立の任務よりこの問題の遂行を圖らればなるまい、統合問題が一部敎團のみの事業であると考ふるものがあるならば、それは未だ日蓮主義を徹底せざるものである、形式上の手續は二三者の勞力を必要とするも、眞實なる統合的運動は、日本の國民一人も殘らずにこの問題に熱注し、大に論じ盛に議し、この思想に歸一する風潮を促進せしめねばならぬ、日本國家の大問題として國民に提供するの方法を取るべきことを要する、現下の急務はこの一事であると信ずる。

精神の訓練

大僧正 本多日生

世の文明が進むに從て生存競爭が劇しくなり、生活上の壓迫に苦しむものが多くなつて來たのは事實である、而して之が爲に煩悶苦惱して人生を悲觀するものが殖えて參りまして、人生を何だか果敢ないものゝ樣に考へて、邁進勇往の心の働きが失せて居る樣であるが、之は心の持方の如何に依るのであつて、人の心は或場合には大變强いものであるが、或場合には大變に弱い、或時は非常に大きい樣に見ゆるが、或は驚くほど小さく見ゆる時もありまして、世の中に不思議なものゝ中で、最も不思議なものが心である、優しい神樣の樣であるかと思へば、鬼の樣な殘忍な態度になる、一人の心に斯樣に極端な異つた有樣が表はれて來る、國家を思ふ立派な大きな心も起るが、財布の中の五錢白銅を心配する樣にもなる、斯の如く變化定まりなきもので、それが長き時間を要しない、一瞬間に移り變つて行くのである、斯う云ふ變化の激しい心であるから、此心に食物を與へて滋養を供給し、訓練を施して之を調へて行かねばならぬ、之を養ひ善導して行つたならば立派なものと爲り得るのである、先帝の御製に

山を拔く人の力も敷島の大和心の基なるべき

と仰せられてある、心が基となつて大事業を遂行し得るのである、心の働き如何に依つて顯はるゝ仕事に大變異目を生ずる、それ故に少し油斷をすると、惡い心が主人公と爲つて、發展的の心を押込めて仕舞ふのである、昔の歌に

心にも及ばぬものは何ありと心に問へば心なりけり

と云ふて居るが、實に心の働きは玄妙なものである、故に人間には精神修養を要するのである、然し心の事は如何に外面から直さうとしても力の及ぶものではない、處が自分で取締らうとしても又出來るものでない佛は人間の精神は猿の樣なものであるとも云はれたが心が落付かないで始終變つて行くことを譬へられたので氣を付けぬと惡い方へ流れて行くことが丁度水の低きに付くのと同じことである、故に平常修養を怠つたならば必ず墮落して仕舞つて人格は劣等に爲るのてある、自分の小我より起る心の淺間敷事に氣付いて修養を勵まねばならぬ、人生における多くの失敗は、吾が精神の根本力が弱つて居るからてある、古語に

外からは手もつけられぬ要害を
中から破るいがの栗かな

吾々の心は外部より容易に破られるものてはないが、自分の心からして破つて仕舞ふのである、例へば薄弱な精神を持つた人が軍人てあるならば、戰の始らぬ前から慄へ上つて仕舞ふてあろう、此等は皆精神修養が足りないからてある、人生は廣い意味の戰鬪舞臺てあるから、剛健不撓の精神を以て戰はねば勝利を得ることは出來ない、退嬰卑屈の根性を押込めて、邁往勇進の精神を鍛へる事が緊要てある、佛の御說にある事ですが、小さな座敷の中に子供が居ると、四方から毒蛇が顯はれて、子供が眼を開けて居れば毒蛇は頭を隱くすが、子供が眼を閉づると直ぐ出て來て子供を食はんとして居る樣な有樣であると云はれて居るが、此は人の心に譬へられたので、子供は吾々の心である、吾々の心が目を醒まして正しき考を持つて居るならば、毒蛇は頭を隱くして居るが、心がぼんやりして居睡をすると毒蛇の樣な惡い考が、吾人の心を占領して善心を食ひ殺して仕舞ふ、善き心とは佛性である、此佛性を覆ひ隱す心を煩惱と云ふ、煩惱は頻に我々の佛性を覆はんとして働いて居るのてあります、儒教には人に明德ありと申しますが物欲が此明德を覆ふて其光を發せしめぬと說いてある、故に吾々は修養の力により佛性をして煩惱に打克たしめ、明德をして物欲に打克た

しめて其本體の光を發することに努力せねばならぬ、我々日本人には建國已來惟神の道として傳はつて居るものがある、神樣は之を形に顯はして傳へられて居りますが、即ち三種の神器である玉と鏡と劍てある、此三器に依て日本國民の心の修養方法が敎へられて居るのてある、大和魂は玉の如く鏡の如く劍の如きものであらねばならぬ、玉は人のやさしい心で親切の最も大なるものを云ふのてある、鏡は明かなることで物を分別し正邪を分つて少しも僞らないのが鏡てある、鏡は曲たものは曲たなりに映しまするが、正直に判斷する智慧を持たねばならぬのてある、又正邪を判斷すると同時に正を取り邪を捨つると云ふことがあつて、而して國民の大和魂は研き上げられて居るのてある、現代は大和魂の智慧て、西洋思想を撰擇しつゝあるのてある、次には劍てありますが、之は勇氣てあります、空元氣は眞正の勇氣てはない、**日本の劍は鏡に伴ふ處の劍て、鏡の智慧て正邪を判斷した上て行ふ果斷決行てある、鏡は熟慮てあつて劍は斷行てある、**故に玉と鏡と劍との三つの意味が揃つた劍てある、此三つの精神が顯はれて日本人の道德と爲つて居るのてあります、此道德は二千五百餘年の歷史に依つて精選せられて居るのてある、此の心が一切の精神の中軸と爲つて居るのてあります、聖人の語に仁義禮智は心に根すと云ふことがあるが、我々の心の中に仁義等が生える根がある、仁は親切な心、義は爲すべきは爲し爲すべからざるは爲さゞる心、禮は上を敬ひ下を慈む心、智は正邪を判斷するのてあるが、それらは自分達の心の中に根があつて、それが芽を吹いて生えて來るのてあると敎へられて居るのてある佛敎には五根と云ふことがある、五根とは(一)信根、自己の誠心に一番善き處を定めて之を標準として一切を判斷する、之を信念と云ふので其の根が心にある、(二)精進根、善き事に奮勵努力する心てある、佛は精進の行をした時は蜆の貝に依つて大海を汲み干したと云ふことがあるが、一寸聞くとお伽話の樣な事てあるが、其精神のある處を見ねばならぬ、人として一旦

心を定めたならば大海をも吸み干すと云ふ決心が大切である、此精神を鍛へ上げて置かなければ人生に落伍者となつて仕舞ふ、(三)念根、一旦教へられた事は、心に銘記して忘れぬ事である、充分に訓練して初信を實行して行くのでなければならぬ、いざと云ふ場合に忘れて役に立たぬ様では何にもならぬ、(四)定根、心が落付いて居ることとである、精神が居据つて居つて動搖せぬ、衣服の干してあるのが幽霊に見ゆる様では何事も出來るものではない、(五)慧根、正邪を判斷する智慧である、此智慧が明瞭に働いて正邪を辨別せねば同じ仕事に努力しても却つて何にも成らぬ場合がある此信根精進根念根定根慧根の五つが吾々の心に根を持つて居るから、此根から芽が出る様に育てねばならぬ、其芽が出たのが五力と云ふて、五つの力と爲つて表に顯はるゝと云ふてあります、此五根を育てるのが大切てあります、然らば此五根を育つる方法は何をすればよいかと云ふに、佛教には聞、思、修と說いて、聞は聞法て能く教を聞くこととてある、思は思惟て、自分の心で練ることとである、修は修習て實踐躬行することとてある、此三段の方法に依つて養ふて行くと、其根力段々生長して行つて力と爲つて顯はれて來るのであります、水戸の光圀卿が大日本史を作つて皇統を正された、此事業の爲めに水戸侯は毎年十萬石を投ぜられて、三代の間約百年間續いたのであります、大日本史の思想が、後代の力と爲つて維新の大業を成就したのであります、處が光圀卿が大日本史の編纂を思ひ立たれた動機を見ると、丁度十八才の時に史記の伯夷叔齊の傳を讀まれて、君臣の名分を論じた事に感憤して此事業は起つたのであります、此感憤せられた事が元となつて、維新の大業を成就し、今日國威を世界に輝かすに至つたので、小事が大事の基と爲つて居るの實證であります、又古い話でありますが、狩野法眼元信が諸國を行脚して遂に堺の妙國寺に行つた、處が妙國寺の住持は舊識であるから暫らくそこに滯在を仕た、元信は大分酒が好であつたと見えて、毎日酒計り呑んで一向筆を取らない、夜になると

何んだかコソ〳〵やつて居る、あまりおかしいものであるから寺の小僧が隙見をした、然るに羽織を頭から被つて手を延したり、擴げ出したりしていろ〳〵の眞似をやつて居る、何うも先生少し氣が狂つた樣だと思ふて居つた、住寺の方でもあまりに書かぬものであるから、少し厭氣になつて到頭元信を追拂ふ樣な考になつて、事を構へて元信に寺を去るべく求めたのである、其時に元信は折角御世話になつたから、百羽の鶴を書かうと思ふて色々苦心をして研究をして居るが、未だ百羽揃はない、然し今日迄御厄介に成つたのであるから、揃つた丈書いて參ろうと云ふて、五十羽程書いたが、それが皆一々形を替へて居つたと云ふ事である、毎夜色々の風を仕て居たのは鶴の形を研究して居つたのである、又杉の戸に杉の畫を書いてそれから寺を出て、東の方へ向て來たが、箱根の麓迄來ると其處にある杉の枝を見て、堺で自分の書いた畫に枝が一本足らぬと考へ、それから泉州堺迄戻つて來て、杉の一枝を書き直して行つたと云ふことが傳へられて居るが杉の一枝の爲めに箱根から堺迄歸へつて行つたと云ふことは、如何に其道に熱心して居るかゞ分る、實に尊き教訓であります、之は常に自分の仕事に就て注意して居るから杉の一枝に氣が付くのであります、我々日本人は長き歴史に依つて研かれたる大和魂を持つて居る、此大和魂を發揮することに努力せねばならぬ、それには自分で自分の心を内省し、足らざる處は之を補ひ、心の根本に豊富なる修養を積み、人生活動の上に大なる効績を擧げらるゝ事を切望する次第であります。

聖訓

『日蓮は日本國の柱なり』
『日蓮は日本の人の魂なり』
『日蓮によりて日本國の有無はあるべし』

實驗信仰の資料

吾が信仰の經歷

記者某日女史を訪ふて過去の信仰と現在の信仰を聞く、女史落付いたる語調を以て諄々として信仰の經歷を語る、記者は同家の現在生活狀態が信仰的發動なるを實見するを得た、談話中可愛い坊ちやんが女史の傍に在りて靜聽して居つた、何とも言へぬ好い氣持の感に打たれた、本題は記者の勝手に、談話は要領を摘記せるのみ。

安川末子

△過去の信仰

私は禪宗信仰の家に生れたのでありますが、暫らく淨土宗の家に居りまして、後に安川家へ參つたものであります、當家は初代から法華宗でありましたけれども、私は法華宗と云ふのはどんな宗旨であるか少しも知りませんでした、子供の時から御寺へ伴れて行かれましたから、信心をせなければならぬと云ふことは心得て居りましたけれども、佛樣の御教と云ふものは念佛より外にないものと思つて居りました、當家初代よりの御墓は法華宗の御寺に御座いますから、御命日なり盆暮には乾度御參りを致しましたが、法華經のことも日蓮上人のことも知りませんでした、知らん計りでない、佛教とは御念佛であると心得て居りましたから、菩提寺へ參詣致しましても晴々した氣持が起りませんでした、先祖樣の墓參は人の禮儀でありまするから致しましたがどうも安心が出來ませんから增上寺へ御參りを致しまして御經を讀んで頂いたり、又法話のありまするたびに聞いて居りました、さう云ふ心持でありましたから、暇さへあれば念佛を唱へまして、三十年間一日の休みもなく致しました、其間に百萬遍修行と申すのを十年

間も致したのでありますが、一日に百萬遍唱へなければなりませんから、室の中一杯になる位の大きな球の珠數で、下男下女に至るまで唱へさせたのであります、それは丁度三十七年に滿期になりましたのであります、が、六萬遍宛は其後も唱へて居つたのであります、そう云ふ次第でありますから、明治十六年淨土宗の寺を建立する事になりまして、夫繁成の名其まゝを寺名と致しまして、繁成寺と申すのを建てました、丁度其年の春の彼岸、國元の姉から繪像の觀音樣を送つて參りました、處が其觀音樣の御像の御腹の邊へ、御彼岸の中日に優曇華が咲いた、外の人は之は珍らしい、子供が生れる瑞相であると云つて大騷ぎをしましたのですが(觀音の腹部に今現に優曇華の四五本あるを記者之を見たり)十七年の三月十五日男の子が生れたのであります(安川家の當主繁種氏なり)その年の九月には前年より建築して居つた繁成寺が落成を告げまして、九月十五日に增上寺の貫首や多くの淨土宗の方々が參られて入佛式を行ひました、斯樣に御寺を建てるほどに熱心なる念佛の信者となりまして、引續いて六字の名號を唱へて居りましたが、三十九年八月二十九日、夫繁成は眠りに就く樣に、繁種の手を握り笑ひながら逝きました、そこで親族等は集りまして、葬式は何宗で致しましようかと云ふ問題が起つたのも無理でありません、淨土宗の御寺まで建てゝある位でありますから、けれども私はその時に、自分が念佛を信じて居つても先祖樣の菩提所は法華宗である上は、先祖樣の後を繼いで其の儀式で致さねばならぬと申しましたので遂に之に決しました、而し私の當時の考を正直に言ひますれば、先祖樣が法華宗であるから、表向この儀式を行ひませんでは相濟まぬと云ふ位でありまして、題目を唱へると云ふことなぞは夢にも思ひませんでした初七日四十九日百ケ日と過ぎまして、一周忌の法要を營みまする時にも、法華の題目では物足りない樣な氣持がしてなりませんから、菩提所の御參りの歸り途に、增上寺なり繁成寺へ行つて念佛を唱へたのでありますが、一周忌を終りましてから、井村僧正に菩提所は法華宗であるし私は念佛でありますから、何うしたらよ

いのでありましようかとお尋ねを致しました、井村僧正は詳しいお話しはありませんでしたが、念佛を捨てて題目を唱へなさいと云ふ御答でした、其後、本多大僧正が御出でになり、同じ信仰にして利益があるか無いかと云ふことを目方に掛けて見て、實際日常の行爲に價直あるものを選ばなければならぬと云ふ事から、日蓮上人の御話しがありました、そこで私は永年唱へて居つた念佛は、功德の無いのみでない罪であると云ふことが少々分りましたので、今日只今より念佛を捨てゝ題目を唱へましようと覺悟を定めました、それから先祖様の前に伏して、永年御心に背いた信仰をして居つた罪を詫び、御許し下さいましと申上げました、斯う云ふ風に先祖様に申上げた上からは、もう念佛を唱へることは出來ない、その後一遍も唱へたことはありません。

▲**現在の信仰**　斯くして御題目を唱へることが出來る様になりました、折しも神田に天晴會の夏期講習會が開かれましたから、一日も缺かさずに拜聽致したが、各先生方の御話しが身に泌むほど難有感じたのみでなく、日蓮上人の御心の光りが自分の胸に應えた様な氣持がしました、依て吾が家を相續すべき子息に對して、日蓮上人の教に基いて信仰せなければならぬ事を教訓をしました、さうして共に信仰する様になり、開基の繁成寺へも増上寺へも一度も參りません、毎日朝夕勤行をするのが、何より樂しく思ひます、過ぎ去つた三十年の念佛修行が恐ろしい様な感じが致しますから、一層強い信心を勵んで、腹の底から力を入れて唱題信行をして居ります、力のない唱題は自分を救ふに足らないのは勿論、子孫を教育することも出來ないと信じて居ります、どうぞ妄想の起らぬ様に、佛様の慈悲心に通ずる様に、心の底から力を籠めて修行をして居ります、是も私共の力ではない、日蓮上人の信仰を勵んで居りまするために、感應の御利益に依ることであると難有く感じて居る次第であります。

水魚の念

（神田明治大學講堂に於て日蓮門下統合後援會發會式の講演也）

法學博士　山田三良

本會を組織致しました事は、趣意書に依て明瞭でありますが、日蓮門下統合後援會は、次のやうな趣旨で出來たのであります、僧侶の方即ち七教團の方々は統合事業を既にお企てになつて居る、從つて僧籍においてになるお方は統合事業の當事者本人であります、是等のお方は後援所ではなく自ら其の局に當つて居られるのであります、後援會は在家の者が統合の趣旨を明にし其の事業の成就を後援する趣意から出來たのである、言ひ換えれば在家一同の力を以て、統合事業に何か貢獻する所があるたいと云ふ志から出來た會が即ち後援會であります、斯う云ふ趣意から出來たものでありますから、其の目的が達せらるゝ迄は、あらゆる手段方法を講じて活動する事と信ずるのであります、それて此の統合と云ふことは如何にも結構なことで、我々日蓮上人の教を奉ずるものに取つては、誠に大旱に雲霓を望むが如き事業でありますから、私は此の事業の一日も速かに完成せられん事を切望する外に又言ふべき事がないのであります、併し乍ら、此處に斯う云ふ機會を得ましたに就きましては、統合事業に關し私の懐抱して居る意見を御話し致したいと思ふのであります。抑日蓮上人の教へと云ふものは、日本國を基として立てられたものでありますか、獨り日本國を教化せんとするのみならず、此の教へをば一閻浮提世界萬國に及ぼし、一切の衆生を救濟すると云ふ大

理想大主義に基いて立宗せられた次第であります、然るに上人入寂後六百年以來の事實を回顧して見ますると云ふと、上人の理想を距る事未だ甚だ遠いのであります、一閻浮提は愚か、日本國中は愚か、上人の教義の行はれて居る所は決して廣いとも言へないのであります、今日は昔の或盛なりし時代よりも事實に於て上人の教を奉ずる者が或は少なくなつて居りはしないかと思はれる位であります、最近三百年以來の歴史に依りましても、此の上人の大理想が如何に發展し如何に遂行せられて來たかと云へば、遺憾乍ら何等の發展をも見ないと答ふる外はないと思ひます、上人が身命を捧げて正法を國に弘めんと努力せられたことは御妙判に依つて明かである、其の廣大無限の理想を以て一切衆生を指導せんが爲に、日夜奮闘せられたものが上人の御生涯であります、然るに此の教義を奉ずる者は、其後今日迄種々努むる所があつたに相違ありますまいが、其の結果に就いて考へて見ましたならば、何等の發展の跡を認むることが出來ないと言はなければならぬと思ふ。是れ第一に我々が驚かざるを得ない點であります、然のみならず、世界萬法迄も統一せんと云ふ上人の大理想を奉ずる者が、種々の派に分れて九派になり十派になると云ふ有様である、而も其の各派相互間の關係と云ふものは、全く宗教の根本を異にする他の宗教に對する關係よりも、尚一層甚しく疎隔せられたる狀態の下に今日に及んだと云ふことは實に宗門の歴史に暗き我々に於ても誠に不可解の問題であります、同じく上人の主義信條を渇仰し、同じく御妙判を奉戴し乍ら、派が違へば僧侶の間にも檀徒の間にも疎通が付いて居られぬ様に見へます、私共此教に入りてより尚極めて日が淺いのであります、從つて宗門の歴史にも疎い者でありまして誠に不可思議に堪へない次第であります、斯う云ふことを考へまして、段々先輩の方に就いて聽いて見ますると、各派夫々道理があつて或は別れ或は合したものであるのでありまする、今日數派に分裂して居る原因の大體を承はりまするに各々一理あるのであつて、どの派が分れたのが惡

いとか善いとか批判を加ふべきでない其時代に依りまして護法に熱心な人々が强烈な信仰から他と相容れない爲に自然分れることになる、さふ云ふ熱烈な人が次第に別箇の派を立てた譯であります、分裂と云ふことは結果に於ては決して好ましいことではないが、分裂の依つて來る所を考へて見ますれば、何れの派に於ても大上人を以て理想と爲し、最も能く大上人の理想に副はんが爲にと、別に一派を立てたと云ふのが歴史上に現はれて居る事實であると思ふ、故に今日に於てどの派が善いどの派が惡いなどと論ずることは出來ませぬ、總て物は久しきに亘つて變らないで居る譯には行かぬ、進歩か、退歩か、何れにもせよ、同一の狀態に止まつて居ることを許しませぬ、若し止まつて動かないならばそれは死物であります、生きた命のあるものは進歩するに非れば退歩する、墮落するに非ざれば向上する。必ず二者の中一に出てねばならぬ、一分間ても靜止して居ることが出來ませぬが、是が一切生命を有するものの原則であります、宗教に於ても亦其の通りて一刻と雖も活動變化無しに居ることが出來ませぬ、されば、分裂と云ふことも一方に於て進歩發展を期待して分裂したものである、何も道樂的の動機から分れたものではない、併し久しい間には分裂して一派を立てた開祖の趣意が次第に消失し、且つ種々の變化が加はり相互に隔意を來すことになつて、以て今日に至つたのであらうと私かに考へて居ります、而して分裂の結果如何なる進歩を遂げたかと云ふに、何等歴史上見るべきものなく、自ら惡い方にのみ傾いて現在に及んだのであります。けれども、是は何も宗門に在る當局のお方が惡いと云ふのではなく斯くならしめたのも亦時の然らしむるものであります、殊に近く德川三百年の歴史を顧みれば、時の幕府は國家の權力を以て日蓮上人の教を破壞せんと企てた、其の大勢力に反抗して今日迄教義を護持せられたと云ふだけのことに於て、日蓮主義の爲め盡された先輩の其の努力が、如何ばかり大きいかと云ふことを我々今日に於て感謝しなければならぬのである、時代が既に斯の如くであつた

から、種々の派が已むを得ず出來て來ると云ふ次第であつたのであります、併し乍ら、今日は如何なる時であるかを考へて見まするに、我が國家は既に五十年前に維新の大改革を經過して國威が世界に發揚されて來ました、此の維新の大改革と云ふものは、今日も統合事業と離るべからざる精神的關係を有して居ると私は信ずるのであります、抑金甌無缺の我が日本國は二千五百年の昔より今日の如く一天萬乘の君を戴いて來た國體であります我が國體は一日たりとも變更はなかつたのであります、然るに源賴朝が鎌倉幕府を開いてより、七百年間は天下の權勢武門に歸して我が國體の皇基が段々と亂れて來まして國體の精神がどこに在るか甚だ曖昧になつて來たのであります、併し斯の如き狀態は日本の國家として許すべからざる狀態でありますから其の時が來つたならば必ず眞の國體が發揮せられなければならぬ筈であります、是が五十年前に行はれた明治維新の實現せられざるべからざりし所以であります、即ち王政維新であります、維新とは言ふが實は王政の復古であります、建國の大本の歴史に遡つて、我が國家の國體と云ふものを發揮するのが明治維新の大精神であつたのであります、此の王政復古と云ふものは、國民一般に勤王心の旺盛になつた結果行はれたのであるが、其の勤王心の鼓舞作興に與つて力多かりしは、國學の勃興や水戶大日本史の編纂であります、而して大日本史は我國體を明かにせんが爲に編まれたものであります、水戶公が大日本史を編纂の動機は何であつたかと云へば、水戶公は日蓮上人の大いなる信仰者であつたから、日蓮上人の感化に基く所が少なくなかつたでありませうし恐らくは大日本史と云ふ名義も上人の御文章の大日本に攻め來ると云ふ所から、大日本の三字を取られたのであらうと信ずるのであります、此の大日本史の史論が維新の大改革に影響する所極めて大なりとは、今更言ふ迄もない、水戶公をして斯の如く國家の大義名分を明にせしむるに至つたのは六百年前に於て既に武家と戰ひ當時の政府の權力と爭うて我が國體の眞義を發揮することに竭された日蓮上

人の大精神が之を爲さしめたものであります、故に春秋の筆法を以てすれば、維新の改革を促したる眞の功績者は日蓮上人其の人に外ならぬと言はなければならぬのであります、此の日蓮上人の精神が實現せられて維新の革新が斷行せられ、爾來日本の國勢は駸々として進み今日の如き盛大を致したのであります、此維新時を期して日蓮上人の大理想が宗教上に於ても發揮せられ、日蓮宗は大に面目を改めて發展しなければならなかつた筈であります、即ち上人の門下に於ても、維新の政治上の改革と共に、我々の宗教上の大革新が當然起らなければならなかつた筈であります、然るに宗門の歴史に於ては、此國家の大革新に隨伴して大上人の理想が發揮せられず、今日迄德川執政三百年間壓迫を加へられたる狀態其儘にて、各派分裂を持續し何等の革新の聲も聞かなかつたのは、日蓮上人の教義に對して遺憾千萬であります、斯の如き考から宗門の先輩の方に於て、是迄度々各教團を統一して上人の宗教を日本國內一般に廣めて行き度と云ふことをお圖りになつたお方が決して少くなかつたのであります、併し種々の事情の爲遂に今日迄それが實現せらるゝに至らなかつたのも、亦已むを得ない時運であつたとは言ふものの一面我々の先輩其他が上人の教義に對して餘り忠實でなかつたと云ふ事も否むことが出來ないと思います、今日となりまして實際に統合事業を計畫せられ、異體同心の聖訓を奉じて宗門の合同を圖る、其の事業を着々實行せらるゝ運びに至つたと云ふ事を聞きまするとと共に、實は私共は果してさう云ふことが出來るがどうかと不安の念を抱いたのであります、何んとなれば、さう云ふ企ては明治三十五年頃にも既に計畫せられた事があるけれども、何等其の實現を見ることが出來なかつたのであります、されば今回の統合のことを初めて承はりました時に、誠に結構なことでありますが如何にも六かしい事ではなからうかと私かに憂ひて居たのであります、何故ならば、僧侶の方にもさう云ふ傾があるやうですが、一般日蓮主義を奉ずる者は等しく上人の門下であり乍ら、派

が違うと宛て敵のやうに、互に折伏することになつて居たのである、日蓮主義は喧嘩主義て、何だか人の惡口を言はないと、日蓮宗てないやうに思はれて居た位てあります、犬猿も啻ならざる七教團、八教團が一つになつて、果して統合が出來やうかと甚だ懸念に堪へなかつたのてあります、然るに時勢の要求が然らしめ統合の機運に向ひ來つた爲に、計畫は圓滑に且順調に進行をして居るのてあります、之は時代の然らしむるものとは言ひ乍ら、現今の各教團の方が如何に翻然として大上人の精神を精神とせらるゝに至つたかと云ふことを證明するものてあります、此の精神を以て事に處して行くならば、如何なる障害が目前に横るとも、統合事業は必ず着々其の緒に就き目的を貫徹することを得ることを信じて疑はない所てあります、斯う云ふ時代になつて來ると云ふのは機運の然らしむる所てあるが、其の機運とは如何なるものてあるか一言致し度いと思ひます、私は及ばず乍ら大上人の教義を奉ずるものてあるが、現在に於て日本人のみならず世界人類を救濟すべき宗教ありやと言はゞ、此の大上人の教義を外にしましては、如何なる宗教如何なる哲學如何なる學問も、現今の社會を救濟するに足る力がないと信じて居るのてあります、是は詳しく申せば種々理屈がありますが、上人が之を仰せられて居るのてある、若し疑のある方がありますれば、私は此の點に就ては及ばず乍ら、何人と雖も議論を戰はして、上人の主義精神を明快に了解せしめない限り決して退かない積りてあります、諸君にして若し私に何等かの信用を置かるゝならば、一切の人類を救濟すべき宗教は、上人の大教義より外ないと云ふ一言を是非御信用あり度いと思ひます、而して日蓮主義を信仰する者は、僧侶と在家とを問はず、皆一切人類の指導者とならなければならないのてあります、是れ上人の教は在家佛法て、僧侶の弟子と檀那の在家と少しも區別はないからてあります、上人は總ての弟子檀那心を一にして、盛に我が日蓮主義を一閻浮提に廣めよと仰せられて居るのてあります、併し是は釋尊の趣旨てあつて、涅槃經にも內に

智慧の弟子があり、外に清淨の檀那ありて佛法初めて全くなると云ふことをお說きになつて居る、又上人は血脈抄に於て次のやうに仰せられて居ります。

『總じて言はば日蓮が弟子檀那等自他彼此の心なく水魚の思を成して異體同心にして南無妙法蓮華經と唱ふる處を生死一大事の血脈とは云ふなり、然も今日蓮が弘通する處の所詮是れなり、若し然らば廣宣流布の大願も協ふべきものなり』

此の通り上人の弟子檀那は水魚の思を爲して相和し、異體同心となつて此の教義を世の中に廣めんと努力する所に菩薩の行がある、此の行を成就することに依つて、初めて上人の大主義大理想を一閻浮提に廣めることが出來る、之を爲すや否やは日蓮上人の門徒てあるや否やの試金石てあると思ひます、日蓮上人の主義を得んと欲する者、大旱の雲霓を望むが如き此の時代に於て、上人の教義を奉ずると口にしながらも、尙此の上人の聖旨を自ら行ふことが出來ない者があれば、僧侶たると否とを問はず、日蓮の門下てあると云ふことを先づ撤去せらるゝが宜からうと思ふのてあります、上人の心を心として此の世の中に立つて正法弘通に努力しなければならぬ、唯徒らに法華經を口に唱ふるのみては、世界を救ふことが出來ないばかりてなく自己をも救ふことは六かしい、されば上人の大理想を實現し一切人類を指導すべき責任ある門徒が、七つにも八つにも分裂して居つては何等の事業目的を成就し得ざるのみか、同體異心てあつて『城者にして城を破るが如し』と仰せられた如く實に獅々身中の蟲てあります斯ては上人に對しても謗法の罪免る能はざるものてあります、玆に於て各教團の方々は、六百年前の歷史に遡つて大上人の聖旨に從ひ統合事業に着手されたのてあります、上人御在世の時に遡つて我々が上人の檀那となつて、其の理想を實現すると云ふことに努力しますれば、宗教の統合事業は決して困難な問題てないのみならず、各種の問題は自然に解決せらるゝこと疑ないのてあります。

思想の撰擇と予の信仰

大正三年の暮、上根岸に金澤氏を訪ひ、談は思想撰擇の問題より信仰に及び、所論盡きる所ない、記者はこの談話中、世を益するものあるを信じ、敢て其要を摘載せり、本題は記者の勝手につけたる也、

藥學得業士　金　澤　　嚴

▲思想の撰擇

人の性格と云ふものは教育に依りて轉回するものであると云ふことでありまするが、それは教育の力としてそうでなければならぬことゝ信じます、而し教育によりて與へられたる先入主と云ふものには、驚くべき勢力が潜んで、それが後には甚だ大なる影響の存するのでありまます、例へば青年の時代に修學して居つた學校の風潮は必ず其人の人格なり思想に印象を貽しまして、愈々社會に乘り出した時には、學校時代の感化が其人を支配することを見るのであります、それてありますから、幸にして善良なる校風てありましたならば、活動時代に好結果を得ましようけれども、不幸惡風に感染して居つたならば、損失する所多大てあるのてあります、殊に思想上の問題に至りましては、始めに周到の用意を以てせなければなりませぬ、誰人でも若い時代に受けたる影響は、その善につけ惡につけ取り除くことが容易てない、彼の大逆事件を惹き起しました幸徳秋水の如きは、嘗て同志社に居つた時アア云ふ思想を頭へ入れたものと思はれる、其後境遇生活上の變化がありましたらうが、それを段々研究の深入をして遂に間違つた事を行はんとしたのてありましよう、相當の理解力を具へて居るものならば、國家の秩序或は國

民の事實上の共同生活と云ふ位の意義は、充分に解らなければならぬ筈てあるが、先入主は恐ろしいものてある、今日でも同志社系の人々は、幸徳等の主張は主義として研究すべき價値がある、彼は實に同情に堪へざるものであると説くものもあると云ふことてあるが、思想問題の先入主は、一生を通じて機會ある毎に生活全體を支配する力があると思はれます、先入主の良否は結果に大なる相違があるのてありますから、國民教育の上には周到なる用意を以て、建國の理想や民族の特性を發揮する様に施設を爲さねばならぬ事てあると思ひます、從て家庭に於ては、その總ての一擧一動に注意を拂ふべきは勿論てあると共に、社會に起る諸般の問題は、社會に於て適當なる取締を爲すことが必要てあると考へられる、我國に存する宗教は、信教自由の下に紛雜極まりなき狀態を呈し、各宗教入り亂れて傳道をして居るのてあるけれども、思想の上より危險分子を含んで居るものもある様に見へる、斯う云ふ危險思想を帶びたる宗教は、今後の兒童青年の先入主とならざる以前に、何等か嚴重なる制裁を加へて取締らなければなりますまい、若し目前に損失がないからと云つて捨てゝ置きましたならば、將來思想自由の熱が高まつて來た時に、國運發展の上に大なる影響がありはせぬかと憂ふるのてある、現代に於ては思想の良否を批判し撰擇して、人心の歸趣する所を明かにする事が急務てあると信ずる。

▲近時日宗各派の統合

運動が現はれて來た様てありますが、この事業は一刻も早く實現を見たいのてある、六百年來の分裂的割據は、偉大なる日蓮主義の光輝を蔽ふて居つたものと謂へる、それ故に一國の明教も立たなければ人類救濟の目的をも達し得ない有様になつて居る、人間も國家も堅實なる宗教の力によりて完全に發達するのてありますから、時代を指導する内容實力を有する宗教が、國家人民の上に尊重せらるゝ様になれば、理想に充ちた文明が建設せらるゝのてある、我國の如きは文明國てあると謂つては居りますが、其內面の狀態

は甚だ貧弱である樣に感ずるのであります、宗敎の形式は中々盛んではありますが、人心を指導すべき活力ある宗敎の傳導がありません、文明の基礎には、必ず偉大なる思想の力が加はることが要件でありますのみならず、既に現代の病弊に醒めた人々は之を要求して居るのであります、斯かる際に日蓮主義の勢力が結合することは、誠に喜ぶべき現象であります、日蓮門下各派の統合は、一天四海皆歸妙法の曙光と見るべきである、一刻も早く日蓮上人の當年に復古して、純正なる信仰を敎ゆる樣に致したいとおもふ。

▲廣大なる日蓮主義

の信仰に入りました私は何とも云へぬ愉快に充されて生活を致して居る次第であります、平常家庭に居ります時は、朝夕に十界の御本尊に歸命して居るのでありますが、旅へ出ました折にも、佛樣の慈悲を頼りとして御題目を唱へて居るのであります、而しながら其祈りは、自分一己の幸福を授けて貰ひたいなぞと云ふ考へは起りません、御題目を唱へる時の心持は、何だか自分の精神生活が小さい樣な感じがしてならぬ、斯かる信仰の程度を以て、果して佛樣の大慈悲に包まれて救濟せらるゝ事が出來るのであらうかと云ふ樣な何となく精神に不安の念が起る場合がある、この不安の起るたびごとに、一種言ふべからざる内省と努力に充ちて參るのであります、不安と云ふ事は信仰の上にあり得べからざる樣に聞て居ります、この不安の念が起りますごとに、自分の限りなき發展を促がす動力である樣に感ずるのであります、さうして何とも云へぬ愉快で尊い思ひが致してなりませぬ、自分はこの信仰の眞最中に不安が起りますごとに、自分の心を引締めて一層强き信念を勵まなければならぬことが解りまするし、佛樣が自分の日常の行動を御覽なされて居ることを直感致しまして、信仰の前には佛樣が實在てあると云ふ日蓮上人の敎示が、一點の謬りなき本化の叫びであることを實際に證明することが出來たのであります。

新春の活動史

四海歸妙を理想として現在の舞臺に活動せる日蓮主義の使命は不斷の努力を以て一歩を進むることに盡さればならぬ

▲一月一日午後一時より東京白山會は國家祈念を爲し三上主幹の聖訓講話あり五時より持寄懇親會を開き三十二名の同信の士女卓を圍んで健康を祝福し交名所感に次で謡曲の隱し藝などあり互に歡を盡して散會したるは十一時なりしが尚ほ居殘れる八九名は午前三時頃まで興味ある談話を交はせしと云ふ

▲六日午後五時淺草永住町妙經寺に於て四恩敎林新年大會を開催し四恩報謝の法要を行ひたる後野口僧正の開會の挨拶と四恩の趣意を說き宮岡海軍中將の感恩と題して有益なる講話あり小原陸軍少將は四恩に對する意義を明かにし矢野檢事は聖訓の感銘すべき微妙の理義を示し石橋中將佐藤少將本多大僧正の講文朗讀あり堂の内外立錐の餘地なく無慮八百の聽衆ありて近來の盛會を呈し尚ほ講演後浪花節手品茶番狂言福引等ありたりき

▲七日午後一時淺草南松山町法成寺に於て佛敎徒新年大會を開催せり聽衆約三百名竹内美術學校敎授は御尊容彫刻の苦心談を述べ小西法學士は身延山における上人の生活を叙し加藤郵便局長は新年の所感を語り關田僧正は日蓮主義の修養は人生活動の根本動力なる所以を論じて感動を與へ餘興として少年劍舞落語日蓮記の芝居などありて中々の盛會なりき

▲八日午後一時統一閣に顯本青年布敎團の講演會を開催『立正安國』―水野乾心―『痛快なる思想』小西體道―『壽量品と開目抄』本多日生―諸師の熱烈なる講演あり

▲同日午後六時小石川原町本念寺大道會初會講演會を開き淺井師の開會に次て國分顯有師は信仰の價値を詳說し熊井本光師は佛陀十德の内容を論明して甚大の感化を與へ蓄音器浪花節落語福引等ありて趣味多かりしと云ふ

▲同日午後一時根岸光明會發會式を擧ぐ根岸堂は日々の參詣者多く亦信仰を求むるもの丶集まる堂宇なれば之に活ける信仰を與へて訓鍊せば鞏固なる一結合を見るに至るべく今回該堂主事の職に就きたる柳生師は新らしき意味を以て團結せんと光明會を組織するに至れり當日法要修了後柳生師は元旦の喜びを永久に繼續するは日蓮主義の信仰によるべきを敎へ關田僧正は信念修養の必要より久遠の本佛を信仰の對境とすべきを論明し三上主幹は死生を超越の信仰を求むべしと述べて一道の光明を與へたり尚同會は毎月八日講演を催ふすべしと同會の健全なる發展を望む

▲十日午後一時統一閣日曜講演會

日蓮上人の個人主義　三上　義徹
平凡なる日蓮主義　井村　日咸
宗敎の眞髓と日蓮主義　本多　日生
現有誠不誠　三好　信道
佛陀の力用　梶木　日種

同十三日午後七時同寺に開催

信根の十種　三好　信道
南無の意義　川崎　英照
人生の光と力　梶木　日種

大阪

▲大正三年の終局講演として十二月八日午後一時中寺町蓮成寺に開催

岡山

▲和氣町に於ける原田日勇師の三年十二月中の活動を見るに十二月十三日赤磐田原妙廣寺開會岡村見惠師は開會を宣べ原田師は信念の基に就て同十四日夜吉原村山上藤三郞宅に開催靈魂不滅同十五六日夜同本成寺に婦人會同信會開催松平信綱逸話及安心の原を述べ十八日夜和氣町川口長次宅に開講して孝の三品に就て二十一日は神根村村上重兵衞宅にて本尊の圖解を二十二日山田村藤原勇三郞宅に道善の意義に就て二十四日赤磐吉原平松吾市宅に龍の口御難を述べ宗敎の靈動を促がせり

日蓮主義勃興の機運に際會し同慶に堪へず希はくは文書傳道上本誌の購讀者勸誘に御助力下さる樣切望この事に候

主幹　敬白

新年の御慶自他幸甚

鹿兒島市松原町
鹿兒島 宮崎沖縄 日蓮宗開教本部
淺野常瑞
支部詰員一同

特に開教費の内へ金一萬圓宗教院より補助第七宗會にて決議せらる漸次基礎成る爲法御悦び希上候

諒闇中の新春を迎ふ

大阪中寺町蓮成寺 梶木日種
千葉縣 吉塚通榮
千葉縣山武郡堂野正法寺 秋葉純一
遠州見付 山本通辨
千葉縣茂原在山根 大川日教
廣島市新川場町本照寺 大橋日襲
同市松川町妙詠寺 島田顯恕
長州萩町妙蓮寺 朝倉俊達
久留米市寺町本泰寺 中原通應

諒闇中始年の禮を缺く

京都寺町妙滿寺 野老日刀
銀井乾升
金光孝碩
川崎英照
三須教英
妙祐久遠寺 坪永日監
寂光寺中 石井寛俊

新年の賀禮を缺く

千葉縣顯本支學林 中村日錦
土屋賢生
竹内無着
成島泰行
齋藤海叔
木村乾中
秋山乾英

謹啓新年の御慶千里動風芽出度奉存候今や日蓮門下七宗合同統一の機運に入り一天四海四海歸妙末法萬年一閻浮提内に廣宜流布の時を迎へんとす南無妙法蓮華經敬具
大正四年壹月元旦
静岡縣濱名郡知波田村太田妙安寺 古定賢正

諒闇中新春挨拶の禮を缺く

追て今般左記の住所に於て教務に從事致居候

△布田目の藥
▲消毒丸
▲布田血の藥
東京下谷上根岸町百十六番地
大賣捌元 根岸堂 柳生正生
(振替東京二九四一〇番)
△根岸堂内に光明會を設け信行部布教部救濟部藥業部を置き毎月八日十八日二十八日大法要を行ひ隨時講演を開催す

虔而開宗六百六十三年の新春を祝し奉る

本化記者團
東京小石川白山前町

新年の御祝辭申上候
▲法華宗專門法衣商
本店 草木伊助
京都市三條通烏丸東入
振替東京一一五五九番
支店 草木伊助
東京淺草三好町二番地
(電話下谷三四三四番
振替東京二五六八番)
▲品質精選迅速正直

▲腦の病に罹れば事物判斷の力が無くなる、胃の病に罹れば身體の活動が鈍く

腦胃の能醫

なる腦胃が健全でなければ人生の活潑なる運動が出來ない▼

NŌI is No.1

腦と胃は極めて重要の關係を有す然るに腦神經を鎭靜する薬物は槪ね胃腸の機能を害し姑息的たるを免れず本劑は腦神經薬たると同時に消化器を健全ならしむる作用を有す故に理想的の好結果を得べき事を確信す

主治効能　腦神經衰弱●ヒステリー●不眠症●腦痛●頭痛●悪夢●胃加答兒●胃弱●消化不良

●薬價三日分金參拾錢　●五日分金五拾錢

本誌讀者に限り約三十％の割引特權あり希望者はハガキにて申込を乞ふ

▼ノーヰはイヰ薬▲

金澤山石堂

東京市下谷區上根岸町百十一番

電話下谷二五九番

日宗法衣專門

靑雲帽　希敎服　袴

此外法衣付屬品一切

京都佛具屋町五条

飯田法衣店

振替大阪六八四七

改暦の機を利し諸賢の御清福を祈る併せて倍舊の御愛顧を希ふ

大正四年元旦

本誌の定價	▲一部郵税共金六錢五厘○半年分金參拾九錢一ヶ年金七拾八錢○新聞讀者は前金拂込されば發送せず
廣告料	表紙うら○うら表紙一頁金拾圓半頁六圓○普通廣告欄は一頁金七圓半頁四圓希望の者は紹介の事
雜誌及廣告料金拂込	東京小石川白山前町十七番地三上義徹振替口座東京二八八四○番へ拂込むべきこと

▲交換──新聞雜誌○新刊書の寄贈其他申込編輯に關する用件は編輯所へ御送附御願候

▲讀者の特權──本誌讀者にして日蓮主義に關する理解を發表せんとするものは、一行廿四字詰に認めて送らるべし本誌に掲げて廣く世に紹介すべし（但し採否は編者の權内とす）

▲講演の需めに應ず（申込は編輯所へ）
本誌讀者にして團のため人の爲め日蓮主義講演會を開かんとするものは御申込次第何時なりとも應諾可致候（但し旅費は實費だけ）

大正四年一月十五日印刷發行

發行兼編輯人　東京市小石川區白山前町十七番地　三上義徹

印刷人　鈴木日雄

發行所　東京市淺草區北清島町十四番地　統一團（電話下谷六千三百十番）

編輯所　東京市小石川區白山前町十七番地

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正四年一月十五日發行（毎月十五日發行）

■天晴會發行■大正三年度■大正四年一月一日發行■

天晴會講演録 第三輯

萬古の偉聖日蓮の絶叫したる抱負識見は凛乎として人心激勵の活力を有す現代人は須らく日蓮の如き精力と意氣とを養はざる可らず人生優勝の地位は日蓮の大氣宇に感孚して得て眞に徹底的なりと云ふべし人間的全生活を無限に發展せんとする現代人は先づ必ず本書を讀むべし本書は日蓮魂に依て靈化せられたる名士の內的生活の公開なり內容の如何に豊富なるかは一讀して之を知るを得べし直ちに一本を購ふて其の身心の莊嚴に努めよ身心の莊嚴と向上とは人生の重大問題なり此の大問題の解決指導は正しく本書內容の特色として紹介するを幸榮とする所速かに本書を讀め

定價金壹圓五拾錢
本文約八百頁
總クロース上製美本
日蓮上人御尊像及講演會寫眞入り
送料（內地金拾八錢 朝鮮滿洲臺灣金四拾錢）

■■ 內容 ■■
姉崎文學博士。本多大僧正。小原陸軍少將。松森權僧正。箕作文學博士。脇田權大僧正。山田法學博士。柴田慶大教授。井村權僧正。小林文學士。其他諸名士の説を讀め

發賣元 東京市神田區美土代町二ノ一 三秀舍
電話本局二〇七九番三三八四番 振替口座二五七四七番

發賣所 東京市小石川區白山前町十七 三上義徹
振替口座東京二八四〇番

貳月號

第二百四十號

統一

大正四年二月十五日發行（毎月一回十五日發行）

日蓮主義者の思想運動　本多日生
時至れるにあらざるか　工學士　寺尾與三
宮岡海軍中將を訪ふ
法華色讀論　顯本大學林教授　關田日城
▲本化記者團夫婦會の記
▲東京癈兵院參觀の記　▲進軍の法鼓
▲精神の修養思想調整の著書に就て　影山謙二
四恩論　陸軍少將　小原正恒